

金融トピックス(97/11)

金融焦熱、破綻の連鎖

やはり97年11月は、日本の金融史に記録される月となるだろう。破綻そのものは予測されていたこととはいえ、たった1ヶ月の間に4つの上場金融機関がバタバタと倒れるとは思わなかった。

破綻の原因については報道で詳しく書かれているから触れないが、金融危機が表面化した92年から現在まで5年余りの時間を空しく費してしまった金融業界が、必然的に辿らなければならなかった道筋と捉えておくべきだろう。生き残るチャンスはあったにも拘わらず、「やばい部分には蓋をして、問題を先送りする」体質を横並びで引きずったまま此処まで来てしまった。それは、「官」に依存することによって確実に収益が保証された時代が余りに長く続いたために、「すぐそこにある危機」に対応出来なくなったエリートサラリーマン集団の限界を示すものであった。

マーケットはそんな金融の弱さを見抜いている。マーケットが「当局に助ける力はない」と認識した時、何とかなると過信していた金融は格好のターゲットとなり激しい攻撃に晒された。そうした意味では、市場の圧力の前に白旗を上げるのは時間の問題だったといえよう。

問題はこれからである。破綻の連鎖は続くのであろうか？ 私達の金融システムは大丈夫であろうか？

残念ながら未だ何とも言えない。それは、日本を含む世界のマーケットの信任を得られるかにかかっている。そして、その信任を得るには、為さなければならないことを時間をかけず透明に行うしかない。今日本は重大な岐路に立っていると認識すべきだろう。

金融破綻、その影響と対策

銀行を中心とした金融機関は、貸出に一段と慎重になるだろう。残念ではあるが、日本の金融機関がここで中小企業を救うための金融措置を採るとは思えない。とすれば、破綻連鎖の余震の影響を最小限に押さえなければならない。

今年1月のレポート「カウントダウンが始まった」で、「最善を望みながらも最悪を覚

悟する」必要があることを書いたが、その必要性は一層深まった。

中小企業の当面の金融取引対応策を列挙すると、キャッシュ・ポジションを高めておく、複数の調達方法を確保しておく、銀行依存度を極力低下させる、等があげられるが、要は高まりつつある銀行取引リスクをいかに軽減するかが重要となってくる。

揺れる短期金融市場

三洋証券が短期金融市場で70億円のデフォルトを起した事を契機として、コール市場で一気に信用不安が広がり、それが拓銀や山一を市場から駆逐した。

日銀は大量の資金を市場に供給し動揺を押さえようとしているが、資金の出し手は資金の取り手の選別を強化し、不安は収まっていない。その為ギリギリとコール翌日物金利が上昇し、銀行同士で信用力に応じて金利をつり上げる銀行間プレミアムが広がっている。

大蔵や日銀は信用不安打消しに躍起となっているが、マーケットの不信は容易に消えない。

超長期固定金利融資が実現

住友銀行が、融資期間最長20年の固定金利融資を始める。10年を超える期間の固定金利融資は、金利上昇リスクをヘッジすることが難しかったため従来は取扱いが殆どなかったが、同行が取り扱いは始めたことにより他の銀行でも追随する可能性が出てきた。

金利スワップ市場が厚みを増すことによって、企業の希望で自在に固定金利融資が出来るようになるのは、そう遠いことではない。10年迄固定金利を希望してもそれに応えられない銀行があるとしたら、それは失格だ。

銀行中間決算出揃う

都銀を始めとする銀行の中間決算が出揃った。それを見ると、今期はさながら赤字決算オンパレードといった様相だ。国税当局ならずとも、税収不足が心配になってしまうほどである。

その決算で最も注目される計数が「不良債権引当率」である。この数字は、公表不良債権総額に対して債権償却特別勘定をどの程度積んでいるのかを示すものである。来週、決

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain 豊島 健治

算短信によって地元3行の中間決算を分析予定であるが、そこで具体的に触れてみたい。